P1-17.

当科における内視鏡補助下 Skin sparing mastectomy 及び一期的乳房再建術の経験

(霞ケ浦・乳腺科)
○名倉　直彌、西村　基、藤森　実
(形成外科学)
松村　一、渡邊　克益
(霞ケ浦・形成外科)
内田　龍志

乳癌に対する関心の高まりやマンモグラフィ検診の導入に伴い、早期乳癌や微細石灰化を契機に発見される非浸潤性乳管癌の頻度が増加している。乳房温存手術は、乳癌の標準術式の一つとして広く認知されており、乳房温存手術を強く希望する患者も多くなっている。また乳房は女性にとってのシンボルであり再建を希望する患者も増えてきている。しかし、マンモグラフィや超音波検査では描出されなかった、広範な癌の乳管内進展や副病変のために、温存手術を断念せざるを得ない症例もしばしば経験される。今回我々は、内視鏡補助下皮膚温存乳腺全摘術 (Skin sparing mastectomy) 及び広背筋皮弁を用いた一期的乳房再建術の 3 例を経験したので報告する。

内視鏡補助下皮膚温存乳腺全摘術 (Skin sparing mastectomy) は、まず術前針生検刺入部あるいは浸潤癌の場合直上の皮膚を切除し、皮切部、乳輪外縁または腋窩皮切部から可視トロッカー及びハーモニックスカルペルを用いてクーパー靱帯を切離し皮弁を形成。次いで、剝離バルーンを用いた大胸筋筋膜前面の剝離を施行し乳腺を全摘した。乳頭まで病変が及んでいないと考えられる症例では乳頭を温存し、乳頭直下の病理診断にて切除断端陽性の場合は乳頭を切除した。広背筋皮弁を起こし、大胸筋前面に挿入し、一期的乳房再建を施行した。

内視鏡補助下皮膚温存乳腺全摘術 (Skin sparing mastectomy) と広背筋皮弁を用いての一期的乳房再建は、十分な局所の制御と良好な整容性が得られ、広範な広がりを認める非浸潤性乳管癌では患者満足度の高い有効な治療法と考えられる。

P1-18.

低侵襲治療を目指した化学放射線併用療法

(口腔外科学)
○藤川　考、里見　貴史、渡辺　正人
松尾　朗、続　雅子、千葉　博茂

現在、頭頸部にとどまらず全身に原発する多くの悪性腫瘍の治療に対して、手術・化学療法・放射線療法の 3 者が、単独で、あるいはさまざまに組み合わせて用いられている。そのなかで、化学療法と放射線療法の併用療法は、新しい抗癌剤や線源の開発や利用によって互いの副作用を軽減させ、両者の相乗効果によって腫瘍の縮小、あるいは消失を図る効果が高いことが明らかとなってきた。さらに、術前治療として両者を併用することにより、腫瘍が消失しないまでも縮小し、切除による組織欠損が小さいために拡大手術が不要になり、低侵襲治療への道を開くことにも繋がることが期待される。当科では悪性腫瘍の治療を、今日まで腫瘍切除と即時再建を中心としながら、いくつかの抗癌剤と放射線術前照射を組み合わせて腫瘍の縮小を図ってきた。そこで今回、当科で行っているいくつかの化学放射線併用療法の抗腫瘍効果について検討したので、その概要について報告する。

P1-19.

光線力学療法における穿刺型プローブの治療効果に関する基礎的検討

(大学院二年・口腔外科学)
○宮本　重樹
(専攻生・口腔外科学)
安田　卓史
(口腔外科学)
金子　忠良、坂口和歌子、千葉　博茂

【目的】 われわれは、Photodynamic Therapy (PDT) を用いて表在性舌癌治療を施行し、良好な成績を得ている。今回、舌癌深部への PDT を確立するために、マウス皮下腫瘍モデルにおいて、第 2 世代光感受性薬剤 (Talaporfin sodium) を使用して、試作の針型先端チップによる穿刺法による治療効果の基礎的検討を行った。

【方法】 実験動物は平均体重 25 g の雄性 Balb/c